

「小児保健演習」の実践報告 —理論と実践を統合するための一考察—

Study on the practice report of child health.
— Research to integrate theory and practice —

磯田 宏子*

Hiroko Isoda

A sudden social change changed child's life environment big. Sense of expectation to a nurture man and a kindergarten teacher is big for society. Therefore further substantiality also turned education of child education with the needed time. This report tells the point that it's devised and a reflection of the class of the student during a session as the teacher who takes charge of teaching. It's tied with class improvement to look back to the class as the class person in charge, and I'd like to make an effort toward improvement of student's understanding.

1 緒言

近年子どもを取り巻く社会環境は大きく変化しており、都市化、少子高齢化、情報化、国際化などの急激な変化は子どもたちに大きな影響を与えている。乳幼児期は身体面、精神面、運動発達面などが人の一生の中で大きく発達する時期であり、人間形成の基盤を形成する大切な時期である。その重要な時期に子どもたちを支援する保育士、幼稚園教諭には多くの専門的な知識が必要であり、養成機関で専門知識を学び、社会の急激な変化によって起こる子どもを取り巻く様々な問題に対応出来るよう専門性を学修している。

大学の授業の中で、子どもたちの心身の健康、安全を中心とした小児保健演習の演習授業を担当する立場から、授業内容が具体的で学生が学外実習を行う時に活用できるよう、また学外実習に対する不安感を少しでも取り除き、実り多い実習が行えるよう授業の中で創意工夫している点などを報告したい。授業担当者として授業を振り返ることにより、授業改善に繋がり、学生のさらなる理解の向上に努めたい。

2 目的

演習科目である小児保健演習を担当する立場として、学内実習における演習科目の重要性を明らかにし、授業の中で工夫している点を報告し、学内実習での演習科目の重要性を明らかにしたい。

3 方法

社会の急激な変化に伴って子どもを取り巻く生活環境は大きく変化し、幼児教育を日々実践している保育士、幼稚園教諭への期待感は大きくなっている。そのため、幼児教育の養成にもさらなる充実を求められる時代となった。小児保健演習を担当する者として、授業の中で創意工夫している点や、授業ごとの学生の感想などを中心として報告したい。課題に沿った関連文献や資料、各種学会誌等に掲載された論文などの先行研究を収集し、保育士養成などでの演習授業の課

* 帝塚山大学 非常勤講師

題点などを参考として検討した。

4 内容

(1) 保育士養成における小児保健演習の意義とは

佐藤¹⁾らによると「小児保健は、理論と実践を統合的に究明する科学であり、子どもの心身の健康を保持・増進することを目指して、これを実践する活動が『小児保健実習』である。平成14（2002）年4月から、保育士試験科目が改正され、保育士養成課程の必修科目であることより、『小児保健実習』の一層の充実が待ち望まれていた。」と述べられており、子どもの心身と健康の保持増進をすることの重要性が述べられている。子どもを支援する立場として子どもの健康についての専門的知識は必須であり、この授業の重要性は明らかである。

(2) 主な授業内容

主な授業内容は、小児の健康状態の理解、身体発育、精神運動発達、事故予防、健康安全管理、小児の発達援助に対する養護の実際などである。養護の具体的な内容として、「乳児の抱き方、背負い方」、「身体計測の方法」、「排泄の世話」、「食事の与え方」、「身体の清潔」などがあり、学生が学外実習に参加した場合に、現場で体験する可能性が高い内容を選んで演習を実施している。

(3) 授業の具体的内容

① 学生の理解を把握するため、毎回授業の終わりにワークシートの記入をさせ提出を求めている。又このワークシートには感想や疑問を記入できる欄も設けている。ワークシートは「受講票」と名付けているが、受講票を回収することにより学生の理解度を把握する事が出来る。受講票は次回の授業には必ず返却するように点検しているが、学生の疑問点に対してすぐに答えることは、学生の授業への意欲の向上に繋がる。また毎回、「受講票」を回収し点検していると、学生の授業の意欲の高まりを把握することを実感することができ、「受講票」の完成度の高さを評価している。返却時には学生同士、評価を確認しているようであるが、お互いの評価が刺激となり、同じテーブルの学生同士の意欲が高まり、充実した内容の「受講票」の割合が増加傾向となっている。また、感想へのコメントも一言記載しているが、素早くレスポンスを行うことにより、学生との距離が縮まっていると感じる。学生の感想を読んでいると、演習授業の重要性を理解した内容が述べられている場合も多く、今何を授業に求めているのかも把握することが出来る。

授業アンケートでも、演習科目の授業が将来的に有用であることを理解したと述べている学生もあり、演習科目ならではの実技のポイントをきめ細やかに指導する重要性を再確認した。

② 少子高齢時代となり学生自身が小さな子どもと接する機会が少なく、小児の実態を理解していない場合が多い。子どもと接した機会が少ないと、子どもへの理解が低くなり、子どもは好きであるが、どのように接したら良いかわからないと、演習科目に対しても消極的になる場合が多い。そのようなケースが年々増加していると実感し、授業の中で出来るだけ子どもの様子や保育所実習の具体的内容を説明し、学外実習で学生が困らないように指導している。例えば排泄介助（オムツ交換）において、現在は紙オムツが主流であるが、保育所によっては布オムツを使用しているところもある事を説明したら、布オムツ自体を見たことがない学生も多い。見たことがないので、もちろんどう対応したら良いかわからないので、排泄介助（オムツ交換）の演習時は、紙オムツと布オムツの両方の介助を経験できるよう授業の中で行っている。こうして学生のレディネスを高めておくことは重要であり、実習後の感想を聞いてみると、授

業で聞いていた内容と同じ事が実習中に発生したが、事前に聞いていたので驚くことなく対応出来たという感想が毎年何例か報告されている。

- ③ 授業の構成は、演習の前に演習に関連する講義を行い、翌週に演習を行っている。特に小児保健の演習は、小児を対象とした内容となるので、演習を行うに前には学生自身の事前準備が必要となる。その内容として、以下の3点が具体的内容である。

ア 学生は演習前には必ず指の爪を切る必要がある。理由としては乳幼児の皮膚は大変デリケートであり、保育者の爪が伸びていると伸びた爪で、乳幼児の皮膚を傷つけてしまう場合があることを伝える。

イ 演習時はアクセサリを外す。指輪は金属製品が多く、指輪で乳幼児の皮膚を傷つける可能性がある。ピアスやネックレスは乳幼児が興味を持って引っ張ることがあり、保育者自身がケガを場合がある。又乳幼児がアクセサリを口に運ぶ場合もあり、実習時には必ず外す必要がある。

ウ 保育者自身が髪の毛が長い場合は、実習時には必ず束ねる。保育者の髪が乳幼児の目の中に入る可能性があったり、沐浴介助や、排泄介助の場合、保育者の髪が濡れたり、不潔となる場合がある。

など、具体的に説明しないと理解が深まらない場合が多い。

- ④ 演習を行うときは事前に実習支援の職員との打ち合わせも重要である。演習に必要な物品購入の打ち合わせや、準備物、演習時の支援、後片付けなど入念な打ち合わせが必要となり、事前打ち合わせの入念さが演習授業の理解度の高まりを左右すると言っても過言でないと考える。

5 まとめ

厚生労働省の「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（第7回）」²⁾は、＜現時点で考えられる総論的事項に関する検討事項の具体的内容（案）＞の中で、保育実践における保育士等のその場の状況に即した判断や対応に関わる専門性（「実践値」「身体値」「暗黙値」など）の重視、食事や排泄等の場面を含めた生活全般を保育の一環として捉える視点が述べられている。この内容は、養成機関の中での、演習や実習の授業の充実が重要であり、実践値を高めるには、理論と実践の統合の基礎が学生時代に求められているのではないだろうか。

小児保健演習は、子どもの成長発達を正しく理解するだけでなく、健康、安全など子どもを取り巻く生活環境の背景まで考察し、保育士などが対応する能力も必要とされる。身体計測を実施しその結果、身長・体重が正常値内であったとしても、母子関係や生活環境なども考慮する必要があることを、学生に理解させたい。演習科目は学生自らが意欲的に技術の習得を得ようとする意欲をもって授業に参加できるよう指導したい。具体的には「乳児の抱っこの方法」や、「沐浴の技術」、「排泄の介助」などを習得し、学外実習や保育現場で活用することを願う。そのためには、理論と実践の統合が必要であり、演習や実習の時間の確保が重要である。科学的に理解し、実践することで学生の理解が更に高まり、保育現場に出た場合、自信を持って子どもたちに対応できるのではないかと考える。

現代社会は目まぐるしく変化しているが、その変化に適切に適応でき、子どもに関わる専門職として意欲を持って保育に邁進できる学生を育成したいと考える。

文献

- 佐藤益子編著：改訂小児保健実習　ななみ書房　神奈川　2009
- 厚生労働省：保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（第7回）＜現時点で考えられる総論的事項に関する検討事項の具体的内容（案）＞（別紙）2019
- 貞岡美伸、上山和子、福原博子、岡宏美：「小児保健実習」の授業に関する調査 ―学生の実習後の認識―
新見公立短期大学紀要　25, pp.179-186, 2004
- 高宮明子、中山美佐：保育実習・教育実習における実習指導室の利用状況と機能：心理的支援、就職支援、学修支援を包括的とした指導　大阪樟蔭女子大学研究紀要　8, pp169-178, 2018
- 丹羽ヤエ子：保育実習指導における実習効果の改善に向けた取り組み＝指導テキスト作成をととして＝永原学園佐賀短期大学紀要　39, pp75-79, 2008
- 宇都弘美：「小児保健実習」の効果＝保育所実習終了後の調査より＝鹿児島女子短期大学紀要48, pp41-48, 2013
- 上山和子、貞岡美伸、福原博子、岡宏美：「小児保健実習」の授業内容の評価 ―保育者の視点からの考察―
新見公立短期大学紀要　25, pp.161-169, 2004